太陽の恵みのオリーブをシンボルとして新たな町おこしを始めよう

（荒廃した田畑の再生と町民帰還をめざし、オリーブを活用した6次産業化の実現）

広野町オリーブプロジェクト（ひろのオリーブ村）

1．目的

原発事故で荒廃した田畑の再生と町民の帰還

- 『東北に春を告げる町』としてみかんが実る温暖な土地で、裕福ではないながらも米、野菜を作り自足自給の生活で物的なものより心の豊かさが感じる町を取り戻したい。
- 狭い、暑い、寒い、孤独という悲惨な状況から、また祖先から引き継いだ土地で一生　終えたいという思いを叶えてあげたいという思いから仮設住宅、借り上げ住宅からの脱却を実現したい。

町民1つとなり、復興できる継続的な支援組織の確立

2. 現状

1. 荒廃して放棄された土地

・田畑にはセイダカアワダチソウ等が我が物顔で田畑を湿っている。
　海岸線も防潮堤が津波で飲み込まれ、潮の入った田畑が現在もその姿を見せている。

☆原発事故以前の自然豊かな風景は見られない。

2. 生活必要環境の未整備と放射能不安

・医療機関、日常生活の必需品を購入するスーパー等が復活していない。（現在600/5400の帰還者）
・放射能の不安が払拭されていない。

☆スーパーや一部の店舗は除染作業の事務所になっている。

3. 課題

1. 帰還しても農業ができない

・原発事故後放置され荒廃した田畑で農業ができるか心配。
・放射能風評の中で米、野菜に変わる作物が見つからない。

2. 帰れる環境にない

・日常買い物に必要なスーパーや健康維持に必要な医療機関が少ない。
・隣の人たちと一緒に帰りたいが、放射能被害で心に負った傷が癒されていない。

4. 対策

1. オリーブを活用して荒廃した田畑の再生で農業を復活させる

・オリーブについて、いわきオリーブの実績から広野町での栽培は可能
・放射能に強い特性の油脂植物のオリーブを荒廃した田畑に植えていく。
　ただ、湿地の土地を好まないので田んぼは適正地を選ぶ必要有り。（P8参照）
・放射能検査と風評被害の実態をつかんで米、野菜に変わる作物として定着を図って行くことで農業の再生を実現していく。

2. シンボルとしてのオリーブを活用して帰還を促す

・かってみかんが『東北に春を告げる町』で広野町が温暖な町であるイメージを定着したように、オリーブで復興させた町をアピールしていく事で住み良い町を作り、町に帰りやすい環境を作る。
　その1つとして小学校、中学校や二つ沼公園にオリーブの植樹をして行く。
　町民自ら、オリーブをシンボルとして町作りを行い広野町を再生することで早期帰還の道筋をつくる。

5. 実施体制と取り組み

事務局
事務局長以下数名

連携

実施委員会
会長、幹事長以下数名

帰還の為の環境を作る

連絡
相談

0.植栽で復興アピール	1.一次産業支援	2.二次産業支援	3.二次産業支援
1.幼・小・中学校へ植樹 2.公園、防潮林へ植樹 3.田畑へ植樹	1.育苗支援 2.植栽支援 3.維持管理業務支援	1.加工製品の共同開発 2.加工場の環境整備支援 3.加工技術向上の支援等	1.販売支援 2.販売ルートの開発 3.サービス向上と観光、イベントの企画・開発

短期的取り組み

いわきオリーブ プロジェクト研究会
日本バーク堆肥協会青木氏(広野町在住)
広野町役場

情報収集・連携

広野町オリーブプロジェクト（ひろのオリーブ村）

シンボルとして活用

効果

広野町の田畑の再生と町民の帰還を実現

中長期の取り組み

いわきオリーブ プロジェクト研究会
日本バーク堆肥協会青木氏(広野町在住)
広野町役場

情報収集・連携

広野町オリーブプロジェクト（ひろのオリーブ村）

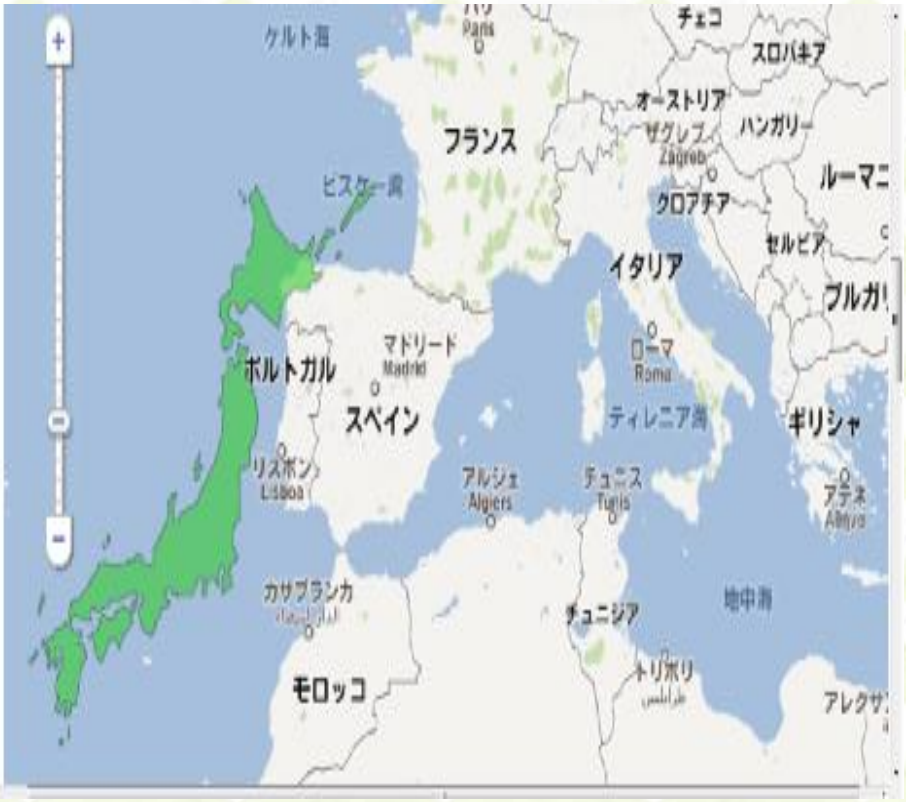
シンボルとして活用

効果

六次産業化と観光事業実現への支援

参考

オリーブ産地のスペイン、イタリアと緯度も変わらず年間日照量も2000時間以上と植栽条件は似通っており、生育に適応した土壌作りを考慮すれば問題ないと考える。

・オリーブの適正気温は、15℃～22℃となっているが、いわき、相双南部地区は12℃～14℃程度で生産可能と考える。

※いわき地方で取れた実を昨年放射能検査を実施し、セシーム等の検出は無く油脂植物は放射能に強い特性があると思われる。